


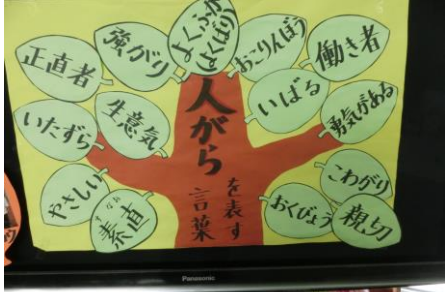
- (1) 単元名：言葉で伝えよう 小泉周二 「水平線」
 (2) 本時の目標：言葉のひびきに気をつけて音読しながら「水平線」という言葉から感じられること(意味)を考えよう。

平成27年4月、佐手小でも新任の先生方に向けて教室が公開された。授業者は去年赴任された教師である。前年度の私の挑戦の授業を新任の校長先生や先生方に観てもらい今後の参考にしてもらうためである。

新任の先生方にとって「なんでこの字、きき合うってどういう意味、学びって何？」不安や疑念は尽きないモノである。かしくまった理論研修も大事であるが、「百聞は一見にしかず」である。何よりも実際を見せてもらうことが新任者にとってはありがたい。共同体はそもそも、互いの弱さや分からなさを共有し、互いを補い支え合いながら生きていくことが目的とされる組織である。本日、授業を提供してくれた授業者Y先生に感謝の念を切に感じるところである。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

<p>[日常をやる。日常でやる。私なりにをやる。]</p>  <p>本日は、村内のへき地の安波小の先生と辺土名小学校の校長先生も参加しての授業研である。教師自身の学びを求めて参加する。</p> <p>「私は日常こんな風にやっていますよ。」身構えず教室を提供してほしい。</p>	<p>[教師の願い] 資料から見える教師の人柄。</p>  <p>右の資料からどんな授業が想像できますか？</p> <p>「さうに、どんな教師の人柄が「一思い」を察することができそうですか？」</p>
--	---

[淡々ととはじまる] 各々でテキストを読む→指名読み(全員)→感想を語る→書き込み→共有する。



見慣れた風景である、子ども達にも授業者にも緊張感を感じられない。和やかに授業が始まる。純真にテキストを音読する。大きな声やみんなでそろえて読むことよりも、自分のペースでじっくり読ませたい。

全員が読み終えたら、子ども達が勝手に語りだす、うなずきながらじっくり聴いてあげている授業者の姿が子ども達に「安心をあえる。」5年生のまおさんと、かいとさんのたどたどしい読みや言葉が教室に響く。お世辞にも上手とは言えない。しかし私は上手になったと確信しながら読みや言葉に聴き入る。

子どもの成長は様々である。「普通」や「平均」しか語れない教師には、この子達を理解することは困難になる。「個性の尊重」とはよく聴くが、何でも横並びに創りあげることだけが尊重ではない。ありのままのこの子達の個性を受け入れてこそ「個の尊厳」である。

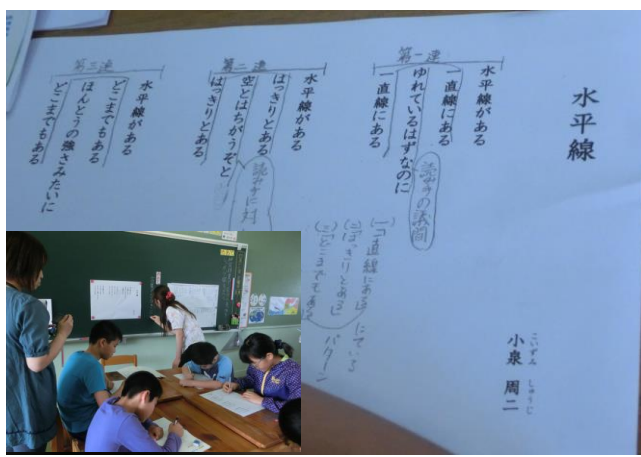


写真①

左写真①、先輩の6年生が常に二人を支える。「分からなければ訊く」、「訊かれたら寄り添う」あたりまえに日常で繰り返されている営みである。今、先輩に優しくされていることは、来年はこの子達が後輩へ引き継ぐこととなる。

しっとり和やかな空気で授業は淡々と深められていく。





[本日のテキスト]

「水平線」、このテキストを取り上げた時点で授業者の心遣いが見てくる。年度当初、「あなたはあなたらしく、一直線に自信をもって生きていって。」授業者が子ども達に伝えたいメッセージを「水平線」というテキストを通して伝えたいのであろう。

へき地校の少人数では、やはり何をやってもほとんど実施される前にその結果や順位を知ることになる。さらに、その事実慣れ合ってしまう、虚無的な姿勢になりがちであるが、授業者はへき地校のこの空気にくさびを打つ。「順位や結果はいいのよ、あなたはあなたらしく、一生懸命頑張ることが大切なのよ。」言葉にしない授業者のメッセージが聞こえてくる。



[共有する]

お互いの書き込みやその理由を聞き合う。実に柔らかに「聞き合う」たどたどしい言葉もなぜかかわいい。あやか：それぞれの連にパターンがある。
ひかる：「ある」の連続が作者の思いを強めている。
まお：どこまでもあるは永遠に？



[2枚の写真]

授業者の真剣な眼差しと柔らかな対話の様子である。「子ども達を分かってあげたい、子ども達の思いを引き出してあげたい。」授業者の言葉が、子ども達の心を開く瞬間である。

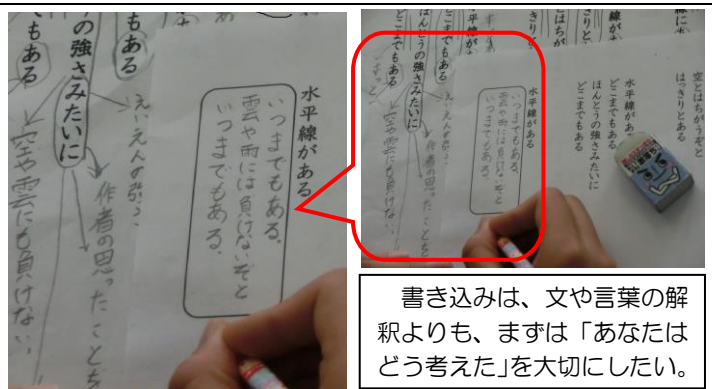
教師の笑顔は確実に子ども達の表情に反映される。お互いが理解された時の自然な営みである。

授業者は、3連で構成された詩に4連めを自分で作ってみることを学習の最終テーマとして子ども達に下ろした。

みんな楽しみながら考える。言葉に触れ、思いを語り、文字から感じ…僕だったら。

「負けない」「永遠に」この二つの言葉に何故かこだわる仲間たち。

何よりも考えている（創作）ときの表情が抜群にいい。僕だったら・・・躊躇しない。互いが伝えたい事の考えや思いが言葉と文字で共有される。



書き込みは、文や言葉の解釈よりも、まずは「あなたはどうか考えた」を大切にしたい。



[授業終末] 音読を入れる。

授業者は、お互いの創作した4連目の詩を共有した後、最終の音読を入れた。授業当初の「読み」と明らかに違っている。たどたどしかった5年生の二人もかなり作者の思いと「水平線」に読み入っている。

僕なりの水平線「負けない」「負けたくない」「はっきりと」「いつまでも」を心の中で唱えながら読んでいる。6年生の読みに聴き入る5年生、小さく胸の前で拍手を送っていた。



Y先生、ありがとうございました。新年度始まってまだ2週目、忙しい中教室を開き、同僚の不安や疑念にこたえる形の研究授業でした。赴任されてきた先生方にとってほんとに温かい「おもてなし」になったのではないのでしょうか。左手小の同僚性の高まりと、研修の深まりに感謝します。頑張ってください。